

# 音楽と幼児との関係



松村康平

音楽と幼児との関係は、どのようにとらえたら、よいだろうか。この関係体験は、幼児の人格形成に、どのような役割を果たすだろうか。

## 八一

音楽については、幼児の生活と関連させて、次の三つの観点から問題を展開していくことができる。

一つは、幼児の成長・発達を中心として、それを促進するのに、音楽が、どのような役割を果たすかという観点から、問題を展開していくものである。つまり、幼児を主体として、幼児に音楽は、どのように取りいれられて、幼児自身の成長・発達がおこなわれていくかという立場から、音楽をみていくものである。

もう一つは、音楽を中心として、音楽は、幼児の成長・発達をどのように促進するかという観点から、問題を展開していくものである。つまり、音楽を主体として、音楽は幼児が、どのようにふるまうように作用し、幼児のふるまい方をどのように変容させていくかという立場から、音楽をみていくものである。

もう一つは、幼児と音楽のどちらかを中心として問題を展開するのではなく、保育活動を発展させる担い手として、幼児も音楽もとらえて、幼児と音楽とが、どのような関係のしかたをすることが、保育活動を発展させ、その発展が、担い手としての幼児や音楽の価値をたかめていくかという観点から、問題を展開していくものである。

る。

この三つの立場は、どのように関連させてとらえたらよいだろうか。

第一の立場は、幼児からはたらしきかけ、音楽のとりいれ方を主とするものであり、第二の立場は、音楽からはたらしきかけ、音楽による幼児の変化のさせ方を、主とするものである。幼児は音楽が好きだ・幼児の活動は音楽的であるというように、幼児に即して音楽をみるのは、第一の立場から導かれ、音楽教育は早くからするほうがよい・早くからすればちょうどことを話すようにほとんど誰でも音楽がたのしめるというように、音楽に即して幼児をみるのは、第二の立場から導かれる。この二つの立場は、しかし、どちらか一つだけでじゅうぶんだといえるものではない。この二つの立場は、これを統合する立場の両極に位置づけられて、それぞれの役割を發揮できるものようである。

この二つを統合する立場とは、どういうものであろうか。

幼児が音楽にはたらしきかけて・音楽をとりいれていくことと、音楽が幼児にはたらしきかけて・幼児を変えていくこと（幼児が音楽にあわせていくこと）との、二つが、調和的な関係になれば、そのどちらも効果をあげることができない。幼児と音楽との交互作用が調和的な関係をたもちながら、発展していくことにおいて、幼児も音楽もいかされるといふ立場から、問題を展開していくのが、二つ

を統合した立場といえるだろう。この統合的な立場と第三の立場とは、どのように関連させてとらえたらよいだろうか。

統合的な立場は、第三の立場と殆んど同じものであるといえる。

違ふところは、幼児と音楽との「関係」に、どこまで優位な地位を与えているかということにみいだせる。いいかえると、統合的な立場では、「関係」を構成する要因が考えられ、その構成要因あつての関係、あるいは、その要因と同時に存在する関係としてとらえられるが、第三の立場では、「関係」を發展させる担い手が考えられるが、「関係優位」にとらえられている。第三の立場では、保育活動の發展が基本的事実として用意され、その保育活動を發展させるものは保育活動自体であるが、その發展の性質を規定するものは、保育活動に参加するものの関係のしかたであると考えられる。保育活動の展開する場にあつて、保育活動に参加するものとして、幼児も音楽も把握され、その関係のしかたが、幼児も音楽も規定して、他の保育活動とは異なる特色をもつ活動が、展開していくと、考えられている。

この立場からは、保育活動の展開する場、および、その保育活動の特性をとらえて、その特性をあらしめている「関係」を探り、そこに、特性をあらしめている関係の一つの在り方として、幼児と音楽との関係を見いだすというようにしていきのである。

ここでは、第三の立場から、更に敘述を進めよう。

保育活動を規定する関係のあり方には、どういふものがあるだろうか。

統合的な立場において重要である「調和的な関係」は、関係のあり方の中でも重要なもの一つである。

保育活動の発展を規定する関係のあり方として「矛盾的な関係」も、重要なもの一つである。

保育活動に関して、方向と道程、発展と展開、動態的把握と静態的把握というようなとらえ方をすると、それに対応させて、関係のしかたにも、動的・可変的・弾力的と、静的・常同的・固定的の区別ができるが、このことと、幼児と音楽との関係は、どのように関連させて理解したらよいだろうか。

幼児と音楽との関係における「幼児の音楽的な関係体験」は、流動的であるといえよう。関係に規定される関係の担い手の体験（関係の両極的体験）は、稀薄であり、関係の変化自体の体験が、主位を占めている。関係の変化の全体的把握が可能なような関係のしかたが、幼児と音楽との関係のしかたにはみられる。

幼児の音楽的な関係体験は、「雰囲気把握する力」を育てているといえる。自分をとりまく世界を、からだぐるみとらえる態度が

養われる。音楽的雰囲気にとらえることによる効果という言い方は、第二の立場から用いられるものであるが、音楽に包まれて全体的にそれをとらえるという、この雰囲気的全体的把握は、音楽によって養われる特色のある態度の一つといえるであろう。

幼児と音楽との関係における「幼児の音楽的な関係活動」は、律動的である。それが、関係の発展するにつれ、関係における緊張を解消して、新たな活動を促進するのに役立つであろう。第一の立場から、これをいいかえると、幼児の生活には、まず、リズムがあるということである。一日の生活、その家庭における生活にも幼稚園（保育所）における生活にも、それぞれの生活に即して、また、一人ひとりの幼児の個性に即して、リズムがみられる。しかし、そのままでは、リズム相互の錯綜やズレや葛藤が生じて、リズムに乗ることが、情緒的緊張をたかめる。このような生活のリズムに、規則的なかたちをもたせ、調和的な関係をもたすことに、音楽的な関係活動は役立つといえるであろう。基本的なリズム（拍子）の修得から進んで、多彩な律動的表出が可能になれば、情緒的緊張を解消することに役立ち、それが心の浄化・情操の涵養になっていく。このような音楽的な関係活動の積極的な役割にくらべると消極的ではあるが。たとえば、現実の生活で緊張が生じたとき、歌をくちずさむことよってそれを解消したり、音楽的世界の中で「昇華」することは、しばしばみられるところである。しかし、このことは

幼児においてよりも、たとえば、身体虚弱な児童が、勇壮な音楽を好んだり、性的要求の躍動する青年期に音楽を愛好する傾向の中において代償あるいは昇華のはたらきとして、みいだせる。

幼児と音楽との関係における「幼児の音楽的な関係認識」「関係洞察」「関係操作」などについて、次に考えてみよう。

幼児と音楽との関係のしかた、とくに、関係のへだたり・関係のつき方（通路）に関して、関係認識が問題になる。いわゆる鑑賞という幼児と音楽との関係の一つのあり方の認識は、共存の意識を育てるのに、役立つであろう。鑑賞において美的感受性を育て、个性的真実を尊重する態度を養い、鑑賞後における話し合いなどによって、共感の範囲をひろめ、進んで個性的な自己表現に導くことが望ましい。

幼児の音楽的な関係洞察は、関係の発展する方向に即して成立する。この方向の洞察には、交互作用の複雑な変動があるにもかかわらず、一定の方向が（メロディの発展に規定されて）比較的容易に洞察し得るかたちで、用意されている。しかし、この洞察は、幼児と音楽との関係における「関係操作」とも、密接に関連して、成立する。

関係の操作に関しては、それをおこなうために、関係活動を長期間にわたって一定の技法で、体験的に把握しなければ、困難をともなう関係の一つとして、幼児と音楽との関係は成立しているもので

あるが、幼児においては、まだその関係活動と関係操作とが、一体となっていて、その相即的な体験のなされるところに、特色がある。「ききながら動く」「受容しながら表現する」これが、音楽との

関係における幼児の自然の姿である。音楽における一定のリズムやメロディーは、関係のしかたに規定されながらも関係の発展を軌道にのせるが、幼児はまた、それに規定されながらも、一人ひとり個性的なりズムの表現をおこなっていく。ここに、幼児と音楽との関係における関係操作の特色がみられ、関係に「適応」しながら「創造」的な発展をもたらすことができる。この関係操作において、「適応をくぐって創造する態度」が、養われるといえよう。なお、合唱や合奏に対応する操作体験は、協調し創作する態度を養うのに役立つであろう。

音楽に関しては、その関係のあり方の体験（情態の把握・感情体験）が、一般に重視されているが、関係認識も重視する必要がある。それにおいて弁別力が養われ、外界に眼を向けて世界をひろげたり、想像力を豊かにすること、楽曲の形式や演奏形態の理解が、鑑賞や表現において重要であることなどを、忘れてはならない。このほか、幼児と音楽との関係を、多者関係的に把握して、幼児の音楽的関係体験について更に考察することが、今後の課題として残されている。

（お茶の水女子大学）